

一宮市三岸節子記念美術館

三岸節子〈短歌ポスト〉入選作品（令和七年前期分）

選者 小塩卓哉（現代歌人協会理事）

【優秀作】

自画像

節子二十歳セピアに透ける瞳の先に豊穡の色広がりゆけり

兵庫県西宮市 松田 かずよ

三岸節子《自画像》
1925年 ©MIGISHI



〔評〕節子の自画像を詠んだ歌は今までも多いが、ここでは、セピア色の瞳そのものと、その瞳が見詰める先を詠んでいる。ただ若い節子は、当然果てしない自分の未来を期待している。そんな将来への期待感を下句のように表現した作者の想像力を讃えたいと思う。

作品I

丸いのも四角に負けぬ大ききで二人並んで空を見ている

毛呂 悦子

三岸節子《作品I》
1991年 ©MIGISHI



〔評〕擬人法の歌。描かれた丸と四角とを二人に見立てている。その二人が空を見ているようだ、作者は想像している。節子の絵画は抽象的であるが、抽象的だからこそ見るものの想像をたくましくする傾向がある。そのような作品の魅力が短歌に滲み出ている。

静物

柑橘を侍らせてるテーブルは節子の青き地平なるかな

犬山市 有本 仁政

三岸節子《静物》
1943年 ©MIGISHI



〔評〕短歌では通常敬語を用いないが、ここでは「侍らす」の語が用いられている。じっと侍り仕えているのは、柑橘であるから、主人はテーブルであるろう。青地のテーブルクロスをして「青き地平」と表現したのは誇張的であるが、節子の大胆な筆致を見事にとらえている。

【佳作】

花と魚

足を止めじーっと見つめて考える白くて長いさかなの名前を
一宮市 大水 音々



三岸節子
《花と魚》
1952年 ©MIGISHI

スペインの白い町

白壁の家並やなみを離れ丘の上に屋根見ゆるなり空との境
江南市 大塚 守明



三岸節子
《スペインの白い町》
1972年 ©MIGISHI

雲と海の対話(夕焼)

沈む陽に大きな海が照らされてさらに大きな雲が燃えてる
千葉県市川市 稲葉 浩運



三岸節子
《雲と海の対話(夕焼)》
1975年 ©MIGISHI

自画像

左眼で私を見つめ右の眼で探しているの変わぬものを
稲沢市 安田 一子



三岸節子
《自画像》
1925年 ©MIGISHI

花(一九八九)

キャンバスに炎のごとき燃え盛る節子の筆は彩いろを織り込む
大府市 山岸 俊哉



三岸節子
《花》
1989年 ©MIGISHI

太陽讃歌(山はくれない)

赤と黄と青節子さんらしからぬ色合いにぼくはどきりとする
末広小学校 六年生 辻川 雄貴



三岸節子
《太陽讃歌(山はくれない)》
1969年 ©MIGISHI